

令和5年度 学校評価 自己評価書(一覧)

評価基準 A—80%以上(良い) B—60～80%未満(まあまあ良い) C—40～60%未満(あまり良くない) D—40%未満(良くない)

園学校名 安田町立安田小学校

項目	中長期経営目標	短期経営目標	短期経営目標の達成状況	自己評価	改善方策	関係者評価講評	関係者評価
知	学習意欲の向上と学力の定着並びに、授業スタンダードの質的向上を目指す	○各種学力調査の結果を分析し、授業改善に繋げる ・全国学力・学習状況調査(全国平均+3P) ・高知県学力定着状況調査(県平均以上) ・総合学力調査(全国平均以上) ○講師招聘による授業研(3回)や校内研修(国語科を中心)に行う。 ○学校評価アンケートにおける保護者の肯定的回答 ・「基礎学力が定着していますか」80%以上 ・「分かりやすい授業に努めていると思いますか」90%以上	○各種学力調査結果より ・全国学力・学習状況調査(2教科とも全国平均+3P以上達成) ・高知県学力定着状況調査(県平均以上)は、4、5年生とも全ての教科において、県平均を下回った。 ・総合学力調査(全国平均以上)は、4年算数・理科、5年国語・算数・理科で達成できたが、それ以外は下回った。基礎学力の確実な定着を図る必要がある。 ○国語科を中心に講師招聘の研究授業は予定通り実施できた。(3回)また、学習指導要領を意識した授業を目指し、授業研の事前・事後の校内研修も実施できた。 ○学校評価アンケート ・「基礎学力が定着していますか」81%で達成できた。 ・「分かりやすい授業に努めていると思いますか」91%で達成できた。	B	○各種調査の分析結果を有効に活用し、課題克服のために計画的に全校で取り組む。 ○基礎学力の定着に向けた、授業改善、チャレンジタイム等の効果的な活用について検証・実践・改善を継続して行う。 ○国語科を中心に、「読解力」を高める授業研を実施し、授業力を高める。 ○より効果的で実践的な校内研修の在り方を探り、研究の繋がりを大切にしていく。	・多様な子どもがいる中で全てにおいて平均以上を求めることは非常に難しいと思われるが、そんな中で先生方は真摯に子ども達に向き合い、限られた時間の中で努力されていることが素晴らしいと思う。 ・電子黒板等を使い、わかりやすい授業に努めている。 ・学力調査で平均を上回った教科もあるが下回った教科が多い。基礎学力定着に向け、取組を継続しながら子ども達が意欲的に学び、達成感を感じれるような授業づくりを行っていただきたい。	B
	家庭学習の意欲向上と定着	○家庭学習強化週間(提出率93%以上・学習時間達成率80%以上) ○家庭学習の手引きを配布する。(家庭訪問時) ○自主学習ノートコンテストの実施(毎月一回)	○家庭学習提出率:92.8% 学習時間達成率:76%で達成できなかった。 ○家庭学習の手引きは配布したが、活用についての検証が十分でなかった。 ○自主学習ノートの充実を目指し、掲示をすることで、児童の意欲向上に努めた。	B	○読書週間(ほめほめ週間)とリンクさせ、家庭学習時間の達成率向上を目指す。(年2回の実施) ○日々の授業とリンクさせるなど、家庭学習や自主学習の取り組み方について検証・改善を図る。 ○自主学習ノートの紹介の方法を検討するなどし、児童のやる気を高める。	・校内に掲示している自主学習ノートの内容からも、意欲的に子どもが取り組んでいると感じた。家庭学習後の自主学習を家庭でも意識していきたい。 ・家庭学習の習慣づけを低学年のうちから家庭の理解を得ながら協力し合って定着を図ってほしい。 ・家庭や子どもとの連携をより充実させる必要がある。 ・1人で学習ができない児童には、家庭学習の手引きの理解ができていないと思う。個人への支援、働きかけの工夫が必要である。	B
	読書活動の充実	○図書委員会を活用し、読書への興味、関心を広める。教職員による読み聞かせも実施する。 ・「本を読むのが好き」(読書アンケート60%以上) ○家庭読書週間を2回実施する。(目標時間:週60分達成率18%以上) ○読書感想文・感想画への応募	○図書委員会児童によるおすすめの本の紹介や読み聞かせ、教職員による読み聞かせ(2回)も実施できた。 ・「本を読むのが好き」54%で、目標は達成できなかった。 ○家庭読書週間を2回実施する。(目標時間:週60分達成率は、8%と目標を大きく下回った。) ○読書感想文・感想画への応募・・・感想文は全学年が参加できた。感想画については1、2年生が参加することができた。	B	○図書委員会活動を、計画的に継続して行っていく。 ・選書会を来年度も実施することで、児童の本への興味関心を高める。 ○読書感想文・読書感想画コンクールに参加することを通し、本への興味関心や表現力の高まりを目指す。 ○ほめほめ週間とリンクした読書週間を実施することで、本への関心や意識の向上を図る。	・読書感想文、読書感想画コンクールへの参加を積極的におこなうことは良い取組だと思う。 ・読書をすることで理解する力がつくため、読書活動充実に向けて家庭でも読書をする時間を確保してもらえるよう、家庭との連携を図っていただきたい。 ・読書の楽しさを知るためのきっかけが必要であるがなかなか難しいと感じる。読書活動の充実に向けて、読書への関心を高める継続した取組が必要である。 ・一冊読み終える毎に達成感を味わえるような工夫をされてみてはどうか。	B
徳	道徳教育の充実	○ほめほめ週間を2回実施する。 ○道徳授業チェックシート【教師用】10項目平均3以上(4点満点) ○道徳意識調査「自分には良いところがある」肯定的評価80%以上 ○心のメモリアル活動の実施・道徳意識調査「家庭で取り組む高知の道徳」の活用70%以上	○ほめほめ週間は2回実施できた。 ○道徳授業チェックシート【教師用】平均3.25で目標を達成できた。 ○道徳意識調査「自分には良いところがある」肯定的評価92.9%で目標を達成できた。 ○道徳意識調査「家庭で取り組む高知の道徳」の活用については、45.2%であった。ただ、心のメモリアル活動において全校で取り組み、「家庭で取り組む高知の道徳」は活用しているが、児童にその意識がうまく伝わっていないので、このずれを改善する必要がある。	B	○ほめほめ週間を実施することで、家庭の意識の高まりを目指す。 ○道徳参観日や心のメモリアル活動をうまく活用し、「家庭で取り組む高知の道徳」の効果的な活用を目指す。 ○各種アンケート結果を検証・考察し、児童に寄り添った対応を心掛ける。 ○ブロックで授業研を行うなど、道徳の授業の実践力を高めていく。	・褒めると言葉数や会話も増え、普段していなかったことをさりげなくやってくれる姿もみられたので、褒めて伸ばすことも大事だと感じた。 ・道徳教育は、大人でも理解し行動できていないことが多々ある。子どもの頃から、しっかりとした道徳心を繰り返し教えることは大切である。家庭環境の違う様々な子ども達に道徳的判断力、道徳的心情を育てていただきたい。 ・教員の日常の言動を児童は目にしている。日々の生活の中に見本があり学習していることを心に留め、あたたかいかわりを継続していただきたい。	B
	生徒指導の充実	○Q-Uの実施と活用(年2回) ・学校生活アンケート「学校が楽しい」90%以上 ・Q-U学級支援シートを作成し、共通理解を図り活用する。(全学年) ○講師招聘(是永かなこ先生)を行い、指導・支援についての研修を行う。	○Q-Uの実施と活用は予定通り2回実施した。 ・「学校が楽しい」児童肯定的評価93.5%で目標を達成できた。 ・Q-U学級支援シートを作成し、校内研修において共通理解を全教職員で図った。 ○講師招聘研修(是永かなこ教授)は、計画通り実施できた。教職員のスキル向上、児童支援につながった。	B	○Q-U学級支援シートを作成、分析し、教職員で共通理解を図ることで、今後の支援に繋げていく。 ○講師招聘研修やサポート事業等を活用し、児童理解、特別支援教育の研究を進める。 ○職員会等で、児童についての共有の場を持ち、全教職員で行動統一を図り、児童支援を行っていく。	・「学校が楽しい」93.5%と肯定的評価である。 ・講師招聘研修で教職員が学んだことを実践に繋げる中で、児童への対応の変化等、質が向上したことがわかるような具体的な姿を教えていただきたい。	B
	人権教育の充実	○道徳意識調査 ・「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思う」100% ・「こまっている人がいたら進んで助けている」95%以上 ○人権標語(全学年)に取り組み、人権意識を高める。 ○人権参観日に講師を招聘し、人権についての理解を深める。	○道徳意識調査 ・「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思う」100%であった。 ・「こまっている人がいたら進んで助けている」91.7%で達成できなかった。 ○人権標語は、全学年で取り組めた。 ○人権参観日に講師を招聘し、講演を実施することで人権についての理解を深めた。(講師:はまゆう教育相談所長 横山 隆 参加者40名)	B	○教育活動全体を通じて、児童の人権意識・人権感覚の高揚に努める。 ○人権標語に全校で取り組み、人権意識を高める。 ○人権参観日を設定し、授業を通し教職員の人権意識・人権感覚を高めるとともに、講演会を実施することで保護者の意識の変容にも努める。	・人権標語の取組は、一人一人が意識をして考えるよい機会になる取組であるため、継続していただきたい。	B

体	体力向上・運動の習慣化	1 体力向上 ○年度末に、立ち幅跳びが上昇した児童の割合 90%以上 ○朝の体操、体育朝礼、体力アップ集会を計画的に実施する。 ○「こうちの子ども体力・運動能力向上プログラム」の活用、外部講師を招聘するなどし、体育科における教師の指導技術向上とともに、体力の向上を目指す。 2 運動の習慣化 ○年度末には、運動時間が増加している児童の割合 80%以上 ○体を動かすことの楽しさに気付き、運動習慣に繋がる授業を展開する。	1 体力向上 ○年度末に、立ち幅跳びが上昇した児童の割合 90%以上（測定中） ○朝の体操、体育朝礼、体力アップ集会は、計画的に実施できた。 ○「こうちの子ども体力・運動能力向上プログラム」の活用、外部講師を招聘（水泳指導）するなどし、教師の指導技術向上とともに、児童の体力向上を目指した。 2 運動の習慣化 ○年度末には、運動時間が増加している児童の割合 80%以上（測定中） ○運動習慣に繋がる授業を目指し、各学年で取り組んだ。	B	○課題のある種目については、変化・取組を検証する上でも、年度末にも実施する。 ○朝の体操、体力アップ集会を計画的に実施し、運動の習慣化を図る。 ○「こうちの子ども体力・運動能力向上プログラム」の活用、外部講師の招聘等で、教師の指導力、児童の体力向上を目指す。 ○委員会活動を積極的に行うことで、児童の意欲向上に努める。 ○体育アンケートを実施し、結果を有効に活用し、授業や体育行事の改善に繋げていく。	・時代の変化とともに遊びも変わってきたが、登下校でも朝早くから徒歩で登校している子どもの姿を見ると安心する。学校でも体力向上等の取組をしているが今後も継続していただきたい。 ・様々なアイデアや取組を行いながら運動の習慣化を図っていることが素晴らしい。 ・外部講師招聘による指導は、普段とは違うプログラムでとても良い。また、教員の技術向上にもつながっているのではないだろうか。	B
	健康教育の推進	○各種アンケートの実施と活用 ・生活実態調査（年度初め1回）、生活リズムチェック（各学期1回）、朝ごはんカード（年1回）を実施する。 ・生活リズムチェック：「メディア視聴時間1日2時間以内」達成率75%以上 ・生活リズムチェック：「6時半までに起きる」60%以上、「早く寝る」63%以上 ○生活改善啓発のため、年間を通して通信（やすだっ子通信・朝ごはん通信等）を発行する。 ○必要に応じて児童、保護者に対して個別相談指導（食物アレルギー・肥満等）を実施する。（夏休み・冬休み前後）	○各種アンケートの実施と活用 ・各種アンケートは、計画的に実施・分析を行った。 ・「メディア視聴時間1日2時間以内」達成率78%で目標を達成できた。 ・「6時半までに起きる」61%、「早く寝る」⇒69%で、どちらも目標を達成することができた。 ○年間を通して通信を発行し、生活改善のための啓発を図った。 ○児童や保護者との個別面談（アレルギー・肥満・偏食等）を実施し、現状と課題を共有した。また、気になる児童（肥満）に対しては、体重測定や軽い運動を日々継続して実施するなど、児童の意識改革を図った。	A	○SSW、専門機関と連携し、情報の共有を図る。 ○アンケートや Q-U の結果を分析し、全教職員の共通理解のもと支援するように努める。 ・校内研修を継続して行い、児童理解や支援の方法についての学習を進め、指導力を高める。 ○保護者面談や個別指導を行うなど、現状や課題を共有し改善に向けた取組を推進する。 ○アンケート結果を検証し、以後の支援に生かす。 ○通信等で情報発信していく。	・個別面談等、保護者との共有、改善への取組をしっかりと行っている。 ・「メディア視聴時間1日2時間以内」の目標達成は素晴らしい。 ・生活アンケートは目標値が設定されていることで児童が目標として意識できるのでとても良い。しかし、取り組み期間が終わると意識が薄れてしまうため、継続した取組につながるよう検討していただきたい。 ・家庭が安定していること、家庭の教育力や親子関係の充実が重要であるが、学校は学校でできる取組の継続に努めながら家庭との連携を図っていただきたい。	A
横断	学校・家庭・地域との連携	○園小連携事業（年間4回以上の交流学习）を計画的に実施する。 ○教科等による小中連携の実施 ○計画的に地域教材や人材を活用した授業を行う。（全学年1回以上）	○園小連携事業（年間4回以上の交流学习）を計画的に実施する。 ○外国語において小中連携を実施した。（6年：1年間、5年：3学期～実施） ○各学年計画的に地域教材や人材を活用した授業を年間1回以上行うことができた。	A	○円滑な園小連携を図ることができるよう、事前事後の計画や振り返りを確実に実施し、互恵性のある連携を目指す。 ○外国語においては、継続して実施していく。さらに、他教科において（図工や体育等）の連携を模索していく。 ○生活科や総合的な学習の時間を充実した活動にするためにも、地域の教材や人材を積極的に活用し、結びつきや繋がりを深めていきたい。	・園小中での連携が図られ、子ども達の情報共有がしっかりとできていることが素晴らしい。 ・異年齢交流は、子どもたちの社会性を身に付けさせる取組としてよい。園児にとって小学校が身近なものとして明確になり、幼稚園から小学校への段差が乗り越えやすくなっている取組である。 ・地域教材、人材活用のためには、学校も地域への参加が大事である。良好な関係を継続していただきたい。	A
	不登校への総合的対応	○不登校児童、別室登校児童：各0人 ○学校評価アンケート「学校生活が楽しい」85%以上 ○SC、SSW と連携を図り、情報共有、支援会を月1回以上実施する。	○各種アンケートは実施できた。不登校傾向の児童は数名いる。【不登校児童、別室登校児童：各0人】 ○学校評価：「学校生活が楽しい」95%で目標は達成できた。 ○校内支援会、特別支援研修は計画的に実施できた。しかし SC、SSW を交えた支援会は数回しかできなかったが、来校時には情報の共有化を図り、児童支援についての助言をいただくことができた。	B	○各種アンケートを参考にし、分析することで、課題解決に向け全教職員が組織として行動統一を図り、取組を推進する。 ○SCやSSW、専門機関等の助言を参考にしながら、継続して支援の必要な児童への対応を目指す。	・教員と保護者との連携により、児童も少しずつ登校する意欲につながっているのではないだろうか。児童理解に努めながらこれからも支援をお願いしたい。 ・児童理解の努力の賜物である。 ・時間の経過とともに改善はされているが、より短期間で改善できるように努めていただきたい。	B
	学校における働き方改革の推進	○時間外勤務月 80 時間未満 100% 45 時間未満 50% ○校務支援システムの活用等、研修を定期的に行う（年3回 時数管理・通知票・指導要録など） ○月1回以上の定時退校日の設定と徹底 100% ○定期的に個人面談を実施する。 ○不祥事を起こさない、起こさせない職場を目指す。（不祥事0）	○時間外勤務月 80 時間未満 100% 45 時間未満 68.9%で目標を達成できた。 ○校務支援システムの活用等、研修を必要に応じて実施した。 ○月1回以上の定時退校日の設定は実施した。また、声かけ等も行ったが、難しい面がある。 ○定期的な個人面談とともに、必要に応じての面談も実施した。 ○職員会や職朝、休み前等で、継続した注意喚起を行った。（不祥事0）を達成。	B	○継続的な声かけ、退校日の設定を行い、教職員の意識を高める。 ○校務支援システム等を活用し、校務や議会の簡素化・効率化を図る。 ○教職員とのコミュニケーションを大切にするとともに、働きやすい職場環境づくりを目指す。 ○不祥事防止に向けた注意喚起を継続し、必要に応じて面談も実施していく。	・限られた時間の中で多様な児童、保護者に対応しなければならぬ先生方は、日々真摯に向き合いながら努力されている。 ・職務の多忙な中で、校務の効率化を図りながら働き方改革を推進していくことは難しいと感じる。 ・教員の意義、人間性が基本である。教員の資質向上に努めていただきたい。	B
	防災を中心とした安全教育・安全管理の充実	○学期に1回安全点検を実施する ○防災参観日等を活用して、「災害時の家族との連絡手段、や合流手段」を取り扱う授業を行う ○避難訓練（地震・津波2回、シェイクアウト1回、火災1回、不審者1回）、防災参観日（1回）、下校時の避難場所の確認（1回）を実施し、防災意識を高める。 ○「児童の防災教育等の肯定的評価」95%以上	○学期に1回安全点検を実施した。 ○防災参観日等を活用して、「災害時の家族との連絡手段、合流手段」を取り扱う授業を実施した。 ○避難訓練（地震・津波2回、シェイクアウト1回、火災1回、不審者1回「教師向け」）、防災参観日（1回）、下校時の避難場所の確認（1回）を実施し、防災・防犯意識を高めることができた。 ○「児童の防災教育等の肯定的評価」100%であった。	A	○毎年危機管理マニュアルの見直しを行う。 ○避難訓練は、事前・事後の振り返りを確実に行うなど、内容を見直しながら継続して行うことで、教職員、児童の意識を高め、対応力を付ける。	・社会の中では、災害だけでなく事件や事故の危険が潜んでいるため、その場に応じて対応ができるような訓練を繰り返し実施して防災への意識を高めていただきたい。 ・昨今の状況からもこれまで以上に安全教育・安全管理において工夫をした取組をお願いしたい。 ・定期的な訓練が行われていることで子どもへの防災の意識づけとなり、より防災への意識も高まっている。	A
	デジタル技術を活用した「学校の新しい学習スタイル」の構築	○タブレット・プログラミング、電子黒板活用の研修を行う。 ○研修で学んだことや実践したことを共有する場を設ける。	○タブレット、電子黒板活用の研修は実施できたが、プログラミングに関しては、研修ができなかった。 ○校内研修やメンター会において、悩み事や実践したことを共有した。	B	○効果的な ICT の活用を目指し、教職員の研修を実施していく。 ○タブレットの持ち帰り等の頻度を増やしていく。	・日常のタブレット持ち帰りも含め、より推進していただきたい。 ・学年により活用に差がみられ、とくに低学年の利用が少なく感じる。 ・プログラミングは今後重要になると思われる。地教委が専門知識をもつ講師招聘を計画してはどうか。	B